

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	R.A	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	英語語学研修		
期 間	2026 年 8 月 1 日～ 2026 年 8 月 31 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

ダブリンシティユニバーシティでは平日の午前 9 時から午後 1 時まで語学学習を行った。途中で 20 分の休憩が挟まれた。授業は事前に解いていたテストの結果によってコースがわかれ、コース別にレベルに応じた教科書を使い、学習を進めた。私は B1+ のクラスであったが、授業の難易度や課題共に適切であったと感じた。先生の判断やテストの結果によってはよりレベルの高いクラスに行くことも可能であった。

懸念点としてはクラスの国籍の構成が 9 割日本人であったことだ。授業の合間や分からなかったところをどうしても日本人同士で日本語を使ってしまう場面が多かった。

授業の内容に関しては、基本的な文法事項を含め、リスニングやライティングを行った。扱った文法の単位としては仮定法や受け身などだ。さらに、教科書に載っているディスカッションの内容をペアで話し合う機会が多く取られた。また、絵や写真について英語でどう説明するかということも行った。休憩も兼ねて英語のゲームをすることもあった。一番多く実施したゲームは「Kahoot!」というゲームだ。このゲームはほかのクラスメイトがどういう問題で間違えたかや、ランキング等も知ることができたため競争力を掻き立て、楽しく学ぶことができた。

そして、毎週金曜日にその週に行った文法が理解できているかを図るテストが実施された。テストの内容はリスニングやライティングも含まれていた。難易度としては比較的易しめであるように感じた。どこの分野が弱いからここの勉強を頑張ろうと先生が一人ずつ伝えてくださることもあった。

印象に残っている授業は、アイルランドの文化に関するクイズをしたことやボードゲームをしたことだ。特に、書かれている単語を英語で説明しチームで当て合うというボードゲームが楽しかった。難しい単語は先生の力も借りながら必死で伝えるよう英語で説明をした。周りも優しかったので間違えた文法を使っていたらどうしようと思い何も言えなくなることもなく堂々と話すことができた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を受けて、文法を英語で全部説明されるという経験が初めてであったため、ネイティブの人はこうやって英語を学んでいるのだと肌で感じる事ができた。例えば、冠詞の「a/the」の違いなどだ。今までは日本の教科書でしか説明を見たことがなかったが、先生に英語で説明を受けて日本語よりも違いがより分かったと思う。その国の人からその国の言語を学ぶことの良さというものに触れられた。また、より日常で使うようなネイティブにとって自然な英語を教えてもらうこともあった。今まで日本の教科書では見たことない語彙を得ることができとても有意義であった。さらに、自分の意見を述べて相手と議論をすることや相手の言っていることをあえて否定し続けることなどを行った。後者については初めての経験であったためとても興味深かった。そのような時に使う様々なイディオムを学ぶことができた。ライティングではクラス全員の英文を読んで回り、訂正をしていくことをした。これによって他のクラスの人々の考えや英語での表現の仕方、筆跡、単語力などを知ることができた。多様な考え方を得ただけでなく、自分と比較をしてここをもっとこうすればよかったなど反省をすることもできた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

まず、授業を受けた後で前と比べて一番に変化したこととしては英語を話すことへの抵抗感が少なくなったことである。授業を受ける前は自分のスピーキング力にとっても不安があった。英語を話すものではなく読んだり書いたりする勉強の面で扱っていたからだ。しかし、授業を通して他国の人々が英語をどんどん話したり質問したりしている姿勢や日本人のクラスメイトの人も積極的に英語を話そうとしているところをみて自分ももっと話さなければと感じるようになった。そこから英語を話すことの抵抗も段々減らすことができた。そして、ホームステイ先の方と話したり地元の方と話したりすることや買い物をする時も緊張しすぎることなく英語を話せるようになった。今までの自分であったら自信のなさからそのように思っていなかっただろう。抵抗感が少なくなったおかげで海外の人ともっと話したい、いろいろな国にも行ってみたいと強く思うようになった。

(4) 今後はどう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今後は前述したようにいろんな国籍の人と話す時や海外に行った時に自分の英語力や培ってきた経験をもとにして生かしていきたい。また、日本に観光に来ている外国人ともコミュニケーションを積極的に取っていきたいと感じた。この留学を通じて英語の自信がついただけでなく、自分にも自信が持てた。世界は広いことを知ることができ、もっと色々な景色をみたいと思うようになった。そのためには英語の学習を継続することは大切だとも実感した。留学で身に付けたことを無駄してしまったら非常にもったいない。そこで、立てた目標は TOEIC で 8 割を取ることである。この目標を達成できるよう頑張って英語に励みたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	W.I	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	第2クォータープログラム		
期 間	2026 年 8 月 1 日～2026 年 8 月 31 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

クラスによってレベルが分けられており、レベル別の教科書が配られたが先生によって授業の進め方や課題の多さは異なっていた。月曜日から木曜日までは授業で、金曜日はその週に学んだことの確認テストが行われた。確認テストはリスニング、リーディング、ボキャブラリー、文法のセクションに分かれていて、時々ライティングもあった。授業内容をしっかり理解していれば難しすぎると感じるほどの問題は出なかった。午前 9 時から授業が始まり、10 時 50 分くらいから 20 分休憩、その後再開し 13 時までの 2 コマの授業だった。一週間で別のクラスに行く人もいたし新しくクラスに入ってくる人もいたが、大部分の人は一か月間同じクラスで先生も変わらなかった。クラスメイトは日本人が大半だったが、ヨーロッパ圏の人も少数いた。

私のクラスでは 15～20 人くらいの規模で、スピーキングを主に新しい語彙を学んだり文法の勉強をしたりした。ペアやグループで答え合わせをしたり、課題について話し合ったり、授業内容を踏まえたゲームをすることもあった。私のクラスの先生は話すことに重きを置いている先生だったので、ペアの人と話したり発言したりする機会があって充実していた。演習については教科書の演習問題を解き、その後全員で答えを確認し合うという形が多かった。間違えた人が多かった問題は先生が例を挙げながら解説をしてくれたので分からなかった部分を無くすことができた。

課題についてはその日の授業で勉強したことの復習とリーディングなどが出た。復習については、文法の演習問題のプリントが課題に出ることが多かった。リーディングについては短い小説を毎日 1 セクションごと読み、1 か月間で 2 冊の本を読んだ。合計 30 分くらいで終わるくらいの量だった。

授業の中で一番好きだったのは、自分について話す時間で、先生からトークテーマが示されてペアの人と自分の考えや経験を話すという内容だった。トークテーマは様々で、難しいテーマはなかったため取り組みやすかった。ペアワークのあと、先生から指名されてペアの人が話していた内容についてクラスメイトに紹介する時間があり、先生から Why や Who など詳しく聞いておかないと分からない質問をされることもあるのでペアワークのときに自分から聞いておく必要があったがそれも面白かった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

文法については過去完了や過去完了進行形など今まで習ったことがあるものだったのでそこまで難しく感じなかったが、しっかりと文法について勉強するのは高校生ぶりで忘れていた部分もあったので復習できて良かったと思う。毎日 1 つか 2 つの新しいイディオムを勉強する時間があり、単語自体は簡単だが聞いたことのないものばかりだった。しかし、日常生活でも使いやすいものばかりで、語彙を増やすことができた。毎日授業の始めに昨日習った単語を聞かれたり、金曜日にそれらを使って自分で例文を作ったり、インプットとアウトプットの両方ができたので身につけやすかったと思う。リーディングなどのなかで出てきた、分からなかった単語は逐一先生が意味を教えてくれたため、分からないことをそのまましないようにできたのが良かった。

私のクラスでは、毎週月曜日に知らなかった単語やイディオムを曜日ごとに書き込めるようになっているプリントが配られて、メモを取ることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

英語は少し得意なくらいで、留学経験がなかったためアイルランドで生活していけるかどうか不安に思っていたが、たどたどしい英語でも先生が熱心に聞こうとしてくれていてとても嬉しく、積極的に話すことができた。間違いを恐れて英語を話さないのではなく、話そうとする姿勢が大切だと感じたし、生徒が積極的に話すことができる雰囲気を先生がつくってくれていたと思う。日本とは異なり、先生の問いかけに対して挙手せずにどんどん発言していく形だったので発言が苦手な私でも発言することができた。それらを通してだんだん自信を持って英語を話すことができるようになったと思う。また、クラスメイトも英語が母語ではない人たちだったため間違いをしても間違いをしても和気あいあいとした雰囲気だった。英語を話すことでクラスメイトと交流し、母国の文化など英語の授業以外のことも知ることができたためもっと英語を勉強したいと感じるようになった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

留学中とは異なり、日本では英語を話す機会がほとんどないので、自分で大学の英語の授業を受講するなどして英語に触れることを続けていく必要があると感じた。また、定期的に TOEIC などの英語の資格試験を受けるなどして自分の英語のレベルを把握し改善点を探すようにしたい。特に私はリスニングが苦手なので、日本でどのようにリスニングを向上させていくか考えなければならないと思う。留学中、英語をもっとうまく話せるようになりたいと感じた場面が多くあったので、そのとき感じたもどかしさを忘れずに英語学習のモチベーションの維持に努めたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	S.I	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	二年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
コース名	英語語学研修		
期 間	2026 年 6 月 29 日～ 2026 年 8 月 21 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業は基本時に英語で英語の授業をする形で PE に近い授業形式出会った。ペアワークやグループでのワークもある。グループワークは四人から六人程度の少人数グループなことが多かった。教科書やプリントを中心に文法や単語を学習していくスタイルでパソコンではなくノートとペンで授業を進めていく。毎週金曜日にテストがあり、そのテストで 2 回連続 8 割を超えるとレベルアップテストを受けることができる。そのテストに合格するとレベルアップできるが、上のクラスに空きがない場合などは移動できない可能性もある。しばしば先生の方からレベルアップテストを受けてみないかと提案されることもあるが、基本的には自分から受けたいと申し出ないとテストは受けられないことが多い。例外的に第一週目にこのレベルが合わないと思い申し出をすればレベルを変えることができる。テストの内容は Speaking/Reading/Listening/Writing/Vocabulary の 5 技能をテストされる。先生によって内容は様々で、私のクラスでは授業内の発言で speaking 能力を採点された。他の先生は先生と対面で会話をするクラスもあったり、Writing は課題として提出する場合もあったりした。従業内容も先生によって左右され、Speaking が多めの先生もいれば一人で黙々とやる先生もいる。私のクラスの場合、宿題は授業内で終わらなかった部分があればその部分を家でやってきてねと言われるスタイルだった。そのため質問などが多く授業が進まなかった場合は宿題が多くなる。これも先生により様々で、毎日宿題を出す戦士マイル。金曜日にコースを修了する生徒が多いためテスト後に文化交流でパーティをしたこともあった。スペインと日本の交流でダンスを踊ったり歌ったり楽しい時間だった。先生はアイルランドとイギリスのハーフだったので、アイルランド語を教えてもらう場面もあった。マイルランド伝統のスポーツや音楽なども教えてくれ、リスニングも兼ねて音楽を聴きみんなで歌う場面もあった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

まずは英語の知識が増えたこと。日本の英語の授業では日本語で英語のことを学ぶため理解しづらい部分が多かったが、英語で英語を学ぶため日本語では理解しづらい部分も英語だと理解できるものも多かった。日本の授業でやってことの復習となる部分が多かったため、内容の復習や再理解にもなりより学びが深まったようにも思う。英単語を英語で説明するのは難しかったが、英語で理解する方が日本語で理解するよりもニュアンスが掴みやすく日本語だと訳が同じになってしまう単語も英語だと違いを知ることができたため良い学びになった。また、イギリス英語とアメリカ英語の違いや、英語の地域による訛りや発音の違いも学ぶことができた。何気なく使っている単語は基本的にアメリカ英語の方が多かったが、アメリカとイギリスで同じ言語を使っているのに単語や綴りに変化が出てくることを学べたのはとても有意義な学びであったと考える。またアイルランドのことも知ることができた。アイルランド語を学んだのはもちろん、授業の中でアイルランドの歴史や文化なども学ぶことができた。アイルランドと日本は同じ島国だが全く違った歴史を持っているとても興味深かった。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前、自分は全然話せないため話すことを恐れ自主的に発言が怖かったし抵抗感を感じていた。しかし、離さないことには何も始まらないし話そうという気持ち自体がなければ成長もできないと感じた。そのため授業を受けた後では、話せるか話せないかではなく話そうとするかしないかということが重要だと考えるようになり、自分の英語力にまだ自信はないけれど話すことを大切にしようと思うようになった。同時に話している相手も文法があっているかはそこまで気にしていないということも感じた。単語だけでも話そうとしていれば相手は聞いてくれるし、表情や声色の方が文法よりも大切に伝えようとする姿勢の方が相手は重要視しているのと考え間違えることを恐れなくなった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

横浜市立大学にも留学生はたくさんいるので、留学生向けの日本語の授業にボランティアとして参加しネイティブの英語話者たちと話せる機会を少しでも増やしていければいいなと思う。また、今回の留学で話せることよりも聞き取れないと会話が始まらないと身をもって体感したためリスニング力を落とさないようにポッドキャストや映画などを通じて英語に触れる機会を減らさないように心がける。また今回の海外生活で海外に住むことが目標となったため、海外で働くこともできるように言語習得とキャリアプランも考えることができたかなと考えている。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	A.I	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
コース名	英語語学研修		
期 間	2026 年 6 月 27 日～ 2026 年 8 月 23 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業は基本的に教科書に沿って進められ、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング、文法の5技能をバランスよく学ぶ内容であった。特定の技能だけを重点的に学ぶのではなく、毎日の授業の中でさまざまな活動を通して総合的に英語を向上させることができたと思う。また、授業では、先生が一方向的に説明する時間を少なく、生徒が積極的に参加することを重視した授業が多かった。課題については、その日に学んだ文法事項の復習問題や、ライティング課題が中心であった。また、プレゼンの準備を課題として行うこともあった。英語を書くだけでなく、自分の考えを整理し、人前で伝える力も学んだ。演習では、ペアワークやグループワークが多く取り入れられていた。クラスメイトと一緒にポスターを作成し、その内容を発表する活動や、与えられたテーマについて意見交換するディスカッションなどを行った。先生から指名されて答える形式よりも、自分から積極的に発言し、会話に参加することが求められる場面が多く、自然と授業内で英語を話す機会が増えた。さらに、授業にはゲーム形式のアクティビティも数多く取り入れられていた。例えば、「kahoot!」や「quizlet」を使ったアクティビティでは、楽しみながら単語や文法を復習することができた。また、ワードキルというゲームでは、教室の壁に貼られた単語の中から、ボードに提示された定義に合う単語を見つけてタッチするといった、体を動かしながら学ぶ活動も行われた。ゲームを通して、学習内容を楽しみながら定着させることができた。このように、授業全体を通して生徒が主体的に参加する機会がとても多く、眠くなったり、つまらなく感じたりすることもなく、集中して学習に取り組むことができた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

英語の知識だけでなく、実際に英語を使ってコミュニケーションをとる力の重要性を学ぶことができた。授業では、リーディングやリスニング、ライティング、スピーキング、文法を総合的に学び、特にスピーキングでは、自分の考えを相手にわかりやすく伝える力が身についた。さらに、授業ではグループワークやプレゼンが多く取り入れられていたため、相手の意見を聞きながら自分の意見をまとめる力や、協力して一つの課題を完成させる力も身についた。英語で意見交換することは最初は難しかったが、積極的に発言することを意識することで、英語で会話を続けることへの自信につながった。また、さまざまな国や地域からきたクラスメイトと交流する中で、それぞれ異なる文化や価値観があることを実感した。授業内での意見交換を通して、自分とは異なる考え方に触れる機会が多く、相手の文化や背景を理解しようとする姿勢の大切さも学ぶことができた。このように、授業を通して英語力の向上だけでなく、積極的に発言する姿勢や異文化理解、コミュニケーション能力など、今後の大学生活や将来にも役立つ知識と経験を得ることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

留学前は、自分の英語が海外で通用するのかわからないという不安が大きかった。特にスピーキングには苦手意識があり、授業中に自分から発言したり、ほかの国のクラスメイトと英語で会話を続けたりできるのかわかっていた。また、授業についていけるか、周囲とうまくコミュニケーションをとれるかわからないという不安もあった。しかし、実際に授業を受けてみると、先生やクラスメイトがとても親しみやすく、間違えても積極的に話すことが大切だという雰囲気だった。そのため最初は少し、緊張していたものの、少しずつ自分から発言することに抵抗がなくなり、英語で会話をすることを楽しめるようになった。また、授業ではグループワークやプレゼンを通して多くの人と交流する機会があり、自分の英語でも十分に意思を伝えられるという自信を持つことができた。留学を終えたいまでは、完璧な英語を話すことよりも、積極的に伝えようとする姿勢が大切であると考えられるようになった。この経験を通して今後も継続して英語力を伸ばし、海外の人と積極的に交流していきたいという気持ちが強くなった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学で身に付けた英語力や積極的にコミュニケーションをとる姿勢を、今後の大学生活に活かしていきたいと考えている。授業ではこれまで以上に自分から発言すること意識し、グループワークやプレゼンテーションにも積極的に取り組みたい。また、留学中に感じた英語力の課題を克服するため、継続して英語学習に取り組み、IELTS や TOEIC などの資格試験にも挑戦していきたい。今回の経験を一時的なものにせず、将来の進路や国際的な場面でも活躍できる力につなげられるよう、今後も主体的に学業へ取り組んでいきたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	R.O	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	2	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
コース名	General English		
期 間	2026 年 8 月 1 日～ 2026 年 8 月 30 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

毎週 1 週間ごとに授業で取り扱うテーマが設定されており、そのテーマに合わせてボキャブラリーと文法を学んでいくスタイルでした。お金、交通機関、ステレオタイプ、スポーツ、感情表現などといった様々なテーマが設定されており、すでに知っているボキャブラリーの再確認に加え、ネイティブスピーカーの先生だからこそ知っている単語やその使い方等も学ぶことができました。

また、私のクラスでは、一日一フレーズ聞いたことのないものを覚えて帰ろう、という取り組みや、英語で書かれた本を一週間（あるいは二週間）で読もう、という取り組みを先生が実施してくださりました。毎日の宿題で文法の演習プリントが配られましたが、それと同時に英語で書かれた本が 1 チャプターごとに配られ、物語を楽しみながらも 5 WH (What/Who/When/Where・Why) を自分で読み解いて考えてくる必要があり、リーディングの良い練習になりました。

毎週金曜日の最後の授業でテストが実施されますが、2 週目のリスニングのテストが難しく、クラスの半数が 5.6 割しか点数をとれていなかったため、先生がその後リスニングを強化したカリキュラムを進めていただきました。レベルが低めのものから試験形式のものまで段階を踏んでいき、やりやすかったです。家に帰ってからの自主学習用として、リスニングの練習になるサイトもいくつか紹介され、授業やテストだけでなくそのあとの演習・アウトプットまでサポートしてくれているように感じました。

前半 2 週間ほどは、1・2 名ほど日本人以外の生徒がいたため、授業のはじめのアイスブレイクで互いの文化を共有したり、同じ物事を指すフレーズでも異なる言語だと表現が異なることを確認したりと、とても短い時間ですが、異文化コミュニケーションをとることもできました。さらにはアイルランドはブリティッシュイングリッシュが主流であるため、ブリティッシュとアメリカンの違い等もたくさん学ぶことができました。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

毎日一つずつ紹介されるフレーズは、今まで簡単な 1 つの単語しか知らなかった言葉を、違う単語の組み合わせによって同じ意味を表せるのは、一気に表現の幅が広がった感覚があります。ひとつひとつの単語自体は簡単な意味のものでも、フレーズになると全く分からない、知らないものばかりで、今まで触れてこなかった「ネイティブスピーカーが実際の会話で使う」という留学ならではの知識を得られました。

リーディングに重視した授業では、長文読解をするときに大事なこととして、三つの段階を例に挙げて説明してくださいました。最初は前置詞や冠詞などの「小さい単語」は無視し(日本語でいう助詞・助動詞)、大事で大きな単語だけを抜き取って読むスキミング、次に自分が知りたい情報を探すために数字や固有名詞だけを文章から探し出す、最後に文章の詳細まで理解するまで最初から最後まで熟読する、という流れでした。

スピーキングでは、日本人は特に言いたいことをうまく文章にできなくて単語だけになってしまいがちなので、せめて SV の構成は意識しなければならないと感じました。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように(気持ちなどが)変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は日本と海外の授業のギャップや環境の違いに緊張していました。よく日本人はシャイだと言われますが実際そうで、特に前半期間はクラスにいる韓国人やイタリア人など外国籍の生徒ばかりが積極的に発言していました。しかしそういった姿を見たり、先生が私たちに発言を促したりするなかで、徐々に自分から積極的に発言しようと意識できるようになっていきました。どうしても自分の答えに自信がないときは「誰かが言ってくれるだろう」という考えで黙ってしまいがちでしたが、答えに自信がある・ない関わらず、とりあえず言ってみるという積極性は持てたと思います。

また授業内で第二・三言語を習得するうえで良い方法についてディスカッションする場面があり、とにかくアウトプットすることと身近なことから置き換えていくことが大事ということを再確認しました。これは日本に帰ってからでも忘れずに生活しようと思いました。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回のプログラムは英語語学研修だったので、今後履修する英語の授業や、卒論を英語で書く必要があるため生かしたいと思っています。語学自体学ぶことが好きで、大学で英語以外の言語を学んでいるほか独学で楽しんでいるものもあるため、英語だけに限らず多言語に共通することをも多く学んだので実践につなげていきたいです。

将来語学をマルチに生かすことのできる職に就きたいという漠然とした夢がありましたが、よりクリアになったように感じます。TOEIC 等の資格も受けて、自身のスキルも把握していかなければならないと感じました。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	H.K	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	Dublin City University		
コース名	General English		
期 間	26 年 6 月 29 日～ 26 年 7 月 24 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

クラスは 12 人程度の少人数で、私が在籍していたクラスには、日本、韓国、フランス、メキシコ、エクアドル、ブラジル、スペインなどから来た留学生がいました。人によって来た時期や滞在期間が異なり、クラスのメンバーは頻繁に入れ替わりました。英語の四技能を高めるためのコースだったため、授業で取り扱う内容は、中学校や高校での英語の授業でやっていたことと少し似ていると感じました。授業で行った活動は、単語や熟語を学習したり、数人グループに分かれて語彙の問題をゲーム形式で問いたり、教科書の英文を読んで読解問題を解いたり、文法を学習したり、リスニング問題を解いたり、教科書のトピックについて話し合ったり、グループに分かれて教科書のトピックに関するポスターを作成したり、ライティング課題に取り組んだりと様々な活動を行いました。教室内の同じ座席にずっと座っているだけではなくて、ペアを頻繁に変えることで席移動が多かったり、廊下のベンチでグループワークをしたりと、日本よりも授業の進め方の柔軟性が高かったことが印象に残りました。授業は全て英語で行われ、文法の説明も英語で行われたため、先生の説明を理解できるまでに時間がかかり、大変でした。教科書は使用しますが、授業の進め方は先生によって異なります。私のクラスでは行いませんでしたが、プレゼンをしたというクラスもありました。宿題は教科書の文法問題や教科書のトピックに関連したライティングなどが出されました。先生にもよると思いますが、そこまで大量に宿題が出されることはありませんでした。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

時制や if を使った文に関しての知識を深めることができました。例えば、過去形と過去進行形の違いや、過去完了形と過去完了進行形の違いがあまりよく分かっていなかったため、授業を通して学ぶことができてよかったと思います。授業内で学習した単語のなかには元々知っていたものがいくつかありましたが、熟語に関しては知らなかったものもありました。ホストファミリーが、私が授業で習った語句を会話のなかで実際に使っており、日常生活でも授業で学習した知識を役立てることができました。

授業内でアイルランド語を教えてもらう機会がありましたが、英語とはかなり異なっていました。アイルランド語を日常的に話す人はあまりいないようですが、grand や lovely といったフレーズは、ホストファミリーも実際に使っていました。

授業内でライティング課題に取り組む機会があったのですが、英語では日本語ほど段落を分けないという特徴があるように感じました。エッセイでない場合は、段落は分けずに書くよう言われました。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

1 週間目の先生が、英語を身につけたいなら喋ることが大事だよ、とお話しされていて、本当にその通りだと思いました。英語のリーディング問題を解く際には文法的な正誤を意識するべきだと思いますが、会話ではとにかく喋ろうと努力することが大事だと感じました。英語ネイティブの方は声が大きい印象があり、会話をする時にはいつも圧倒されてしまってあまり話せないことが多かったのですが、今回の留学でのクラスメイトは声が大きすぎず、話しやすかったです。相手から話しかけてもらうのを待つだけではなくて、自分からも話しかけられるようになりました。3 週間目には、カナリア諸島からやってきた留学生たちと同じクラスになりました。彼らはスピーキングに関してはとても上手でしたが、語彙や文法に関しては自分と同じくらいの知識量でした。ですが、自分とは異なっていた点は、この問題はなぜこの解答になるの、といった質問を積極的にしていた点です。分からないところや不安なところは「分からない」という意思表示をすることが大切なのだと感じました。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

英語での会話では、質問内容を理解すること、返答を自分のなかで考えること、それを英語に翻訳して伝えること、という 3 つの段階があると思います。コミュニケーションをうまく取るためには、1 人で一方的に話すのではなくて、相手の話を理解することが必要だと感じました。今後は、まずは相手の話をよく聞いて理解してから自分の意見を伝えるということ意識しようと思います。

今回の留学で、自分自身の英語学習における得意なところと苦手なところが分かりました。リーディングは比較的得意ですが、リスニングはあまりできませんでした。この気づきをかいて、家では英語のラジオを聞くようにしてリスニング力を鍛え、外国の方と関わる機会があれば積極的に英語で話すということを心がけようと思います。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	H.K	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
コース名	英語語学研修		
期 間	2026 年 6 月 27 日～ 2026 年 8 月 24 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

クラス編成は、レベル別に別れていてそれぞれ 15 人程度のクラスだった。国籍も様々で、スペイン、メキシコ、韓国、中国、サウジアラビアなど幅広くいたが、時期的にも日本人が一番多かった。毎週月曜日に新しく来た人が既存のクラスに合流する形で、毎金曜日にその週のまとめのテストがあった。課題は授業で習ったことをアウトプットする形が多く、大体が教科書に書き込むものか、教科書に沿ったプリントが配られそれに書き込んで、次の日の最初に答え合わせをするというものが多かった。先生にもよるが、課題が出ないことも多かった。授業は基本的に教科書に沿って進むが、ペアワークやグループワークが多く、ディスカッションなどのスピーキングやコミュニケーションが積極的に取り入れられていた。新しく習う単語はカードゲームで覚えることが多く、一人一枚紙が配られ、そこに書いてある単語の意味をまずは自分で確認し、クラスメイトに見せて説明してもらい、できなかつたら自分が説明するのを繰り返して覚えた。とにかく英語で会話をする、ペアでディスカッションをするといったスピーキングを中心とするアクティビティがメインで授業が進んでいき、様々な国籍の人とペアを組むので英語の発音も国によって異なり、今まで聞いてきた英語とは全く違う発音の英語も聞き取る必要があるため、リスニング力も大きく伸びるような授業内容だった。毎週金曜日のテストが早く終わるとお菓子を持ち寄ってお菓子パーティーをしたこともあり、その時間はフリートークだったため、英語での日常会話の力が伸びたり、異文化を本場の人の口から聞ける良い機会になったりした。テストはその週に習ったことのみが出題されるため、単語や文法を復習しておけばそこまで苦労する内容ではなかった。2 週間に一度、金曜日にレベルアップテストがあり、申請して受験し受ければ次の週から一つ上のレベルのクラスに移れる制度もあった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

習った単語や文法をその日のうちに実際にクラスメイトとの会話やホストファミリーとの会話で使える感覚をつかむと忘れにくいと感じたし、授業内で覚えたことや使うだけではわからなかったことが見えてくる感覚が面白いと感じた。また、最初はメキシコやスペイン出身のクラスメイトの英語を聞き取るのに苦戦していたが、だんだんと聞き取れるようになってきたことで、英語を聞き取るには耳を慣らすことが一番大事なのではないかと思った。スピーキングの時間では自分が言いたいことを話すために、自分が知っている単語内で、言いたいことがいちばん伝わるようにするにはどうすればいいかを考えることで、だんだんと頭の中で考えてから話す工程や時間が減り、よりスムーズに会話ができた。また、先生や違う国籍のクラスメイトから、現地で使われる英語は何か、どちらの方が頻出か、何は言わないか、国によって話されている英語の違いは何か、イギリス英語とアイリッシュ英語の違いは何かを教わるなど、教科書に載っていない知識を知ることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、2ヶ月間という短い期間で自分の英語力はどこまで伸びるのか不安が大きかったが、2ヶ月経った後は圧倒的にスピーキング力とリスニング力が上がったと実感することができた。今まで自分が触れてきた英語は日本人が話す英語で、実際に世界で話されている英語は様々な発音やアクセントがあることに気づき、もっと多くの種類の英語に触れ、様々な英語を聞き取って理解できるようになりたいと感じた。スピーキングの面においては、日常的に、英語で自分が言いたいことをどのようにいうかを常に考えるため、それに当てはまる文法や単語が授業で出てきた時に、頭の中で一致する感覚を味わうことができたことで、英語は習う・覚えるだけのものではなく、実際に自分が会話する中で使うものだ意識しようという気持ちに変わった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

留学していた一時的な期間だけ英語を使うのではなく、帰国した後の日常生活でも使っていけないともったいないと感じるので、英語ならどう言うかを考えてみたり、英語を聞く時間を増やしたり、小さな意識を積み重ねていきたい。英語で行われる講義を取るのには、日本語での講義に比べて少し抵抗があったが、留学で得た知識や力を自信にして、維持したりより伸ばすために積極的に受講していきたいと思っている。また、留学に行ったことで今までは本当の意味の異文化理解ができていなかったと気づいたので、その感覚を忘れずにいたいと感じた。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	K.S	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	2	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	英語語学研修		
期 間	2026 年 8 月 4 日～ 2026 年 8 月 28 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業はレベルごとにクラスが分けられており、月曜日から金曜日まで毎日授業が行われた。授業は1日2コマで構成されており、それぞれ2時間の授業であった。

授業の内容は主に教科書の内容に沿った文法や表現、テーマに関する語彙の学習をし、その後問題演習などを行った。テーマは、果物、イギリスの公共交通機、アフリカの学校など様々だった。教科書の内容は主に、語彙表現、発音、リーディング、文法、リスニング、スピーキングなど様々な英語の技能を扱う構成になっていた。文法では、具体的には現在進行形や、完了形、前置詞などについて学習した。

1 コマ目で教科書の内容を中心に文法や知識を学ぶのに対し得

2 コマ目の授業では、1 時間目に学習した文法を実際のコミュニケーションで使用した。例えば、学んだ文法や表現を使ったゲームや、テーマに沿って会話をするなどをし、クラス全員で活動したり、グループに分かれて英語で会話などをした。

課題は特に課されず、その日に学んだ内容の復習をするように指示されていた。

毎週金曜日はテストが行われた。内容は月曜から木曜に学習した文法のテストで、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの4技能を含む総復習だった。

特に印象に残ったのは、学習した文法を使って行ったゲーム形式の活動である。他の学生と会話をしながら文法を使うことで、実際の会話の中で英語を使う練習になった。

また、教科書で扱った内容として印象に残ったのは、ステレオタイプについてのテーマである。日本に対する外国から見たイメージや、外国に対するイメージの出身国による違いなどを感じ、興味深かった。

授業の最初では教科書の内容について学ぶ前に昨日の出来事やアイルランドの文化について少し会話することによってアイルランドの文化についても学んだ。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

英語の表現について主に学習した。授業を通して、これまで日本での授業で学んできた英語の文法や表現についてあいまいに理解していた部分をより明確にすることができた。特に最近はコミュニケーションが中心で文法がおろそかになっていたため再び学ぶ良い機会になったと感じている。

また、授業で使用していた教科書はイギリスの英語の教科書であったため、英語の文法などの知識を得ることはもちろん、イギリスならではの表現を学ぶこともできた。これまで日本で学んだ文法と少し異なる部分を学ぶこともできた。日本で学んだ英語で意識していなかった表現や、アメリカ英語との違いを感じることで、地域による様々な表現や特徴を実感した。

さらに、英語そのものの表現だけでなく、英語圏の文化についても学ぶことができた。例えばイギリスの公共交通機関についてやステレオタイプに関して扱った。英語を学ぶ際にその言語が使用されている国の文化や社会についても知ることで、言語をより身近に感じることもできた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

大学で英語の授業を履修しなくなってから、英語に触れる機会が減少したことで自分の英語の運用能力が衰えてきていると感じていた。またヨーロッパの文化についても興味があったことから外国で英語を学んでみようと考えた。実際の授業を通して、また日常で英語に触れることで再び英語を学ぶことや英語でコミュニケーションができることに対する楽しさを思い出すことができた。

また、自分の課題についても気づくことができた。スピーキングのテストでは、先生から私に話した文法について指摘を受けることで、自分で気づいていなかったスピーキングの欠点に気づくことができた。その経験から英語で話すときにより正しい文法を意識して話すようになった。今回の留学を通して、英語を学び続けたいという気持ちが以前よりも強くなったと感じている。

(4) 今後はどう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今後は、今回の留学を通して改めて感じた英語を学ぶ楽しさを糧に継続して英語の勉強に取り組んでいきたい。自分の現在の英語力を客観的に知るために TOEIC の受験をする予定がある。まずは 700 点を目標にしたい。また言語そのものへの興味もより強くなったため、大学で学んでいる中国語についても学習を継続していくことで英語だけでなく複数の言語に触れながら学習を進めていきたいと考えている。また、ヨーロッパの文化を身近に触れたことで文化についても興味が湧いた。このことから大学で関連する講義を受講して知識を深めたいと考えた。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	M.T	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
コース名	第2クォータープログラム		
期 間	2026 年 8 月 4 日～ 2026 年 8 月 28 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

週5日、9時～10時50分・11時10分～13時で行われた。基本は教科書に沿って学習がすすめられた。週ごとに money や transport など大きな題材があり、1週間で1つの題材を扱って学習した。具体的には、題材に沿った語彙やフレーズについて学習した。また、リスニングやリーディングも教科書のエクササイズに沿って行った。そのほかには、文法も学習し、過去完了や進行形、a と the の違い、can, should, must などについて学んだ。教科書以外の活動としては、担任の先生が用意してくれたリーディングやリスニングのエクササイズを行った。また、私のクラスでは、授業の最初に毎回1つネイティブが使うようなフレーズを教えてもらった。そのほかにスピーキングの活動も多く、毎日先生が用意した5つほどの質問についてペアで話し合ったり、教科書に関するスピーキングのアクティビティを行ったりした。スピーキングでは、4人ほどのグループになって引いたカードに書かれたものや場所でストーリーをつくるというアクティビティが楽しさと面白さがあり印象に残った。ゲームのアクティビティもあり、日本でいう山手線ゲームのようなものなどを行った。週のまとめとして金曜日の2コマ目には毎週テストが行われ、語彙、文法、リスニング、リーディングについてのテストが行われた。そのため、金曜日の1コマ目は1週間の復習が行われた。また、課題としてライティングが出され、テストのような扱いだった。課題については、語彙や文法に関するエクササイズが多く出された。私のクラスではテストの傾向を見て、リスニングが苦手な人が多かったため2週目ぐらいからはリスニングに関する課題も出されることがあった。また、短い英語の本を読む課題が出され、1日1チャプター読み、次の日クラスで内容を共有した。そのほかの活動としては、担任の先生が授業内で新たに習った語彙を毎日書くようなプリントを用意してくれたため、初めて学習した語彙があったら書き込むようにしていた。そして金曜日になると、その週で特に覚えておきたい語彙を5個ほど選び、その語彙を使用して文をつくるというアクティビティが行われた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を受けて、個人的に毎日教えてもらえるネイティブの方が使用するようなフレーズに関する知識を得ることが出来たのが楽しかった。教科書に沿った新たな語彙の知識を得られるのも楽しかったが、フレーズが表示されて意味を予想する時間や、クラス内外でそのフレーズを使って友達と話すのが特に楽しかった。語彙以外でも、過去完了などの文法についての知識を身につけることもでき、日本で習ったことがあるものだが、さらに詳しくニュアンスの違いを学ぶことが出来た。また、リーディングやリスニングの問題を解くコツについての知識も得ることが出来た。具体的には、リーディングの問題を聞く前には、ポイントとなる単語をチェックし、自分が数字や場所など何について聞き取ればよいか理解したり、リーディングでは、5W1Hを意識して読んだりすればいいということを学ぶことが出来た。そのほかに効果的だと感じたのは、文の中で単語と単語をつなげて読むことに関する知識を身につけられたことだ。私は、同じアルファベットはつなげて発音するなどつなげ方のルールを初めて学ぶことが出来たため、発音がネイティブに近づけたような気がして楽しかった。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、初めての留学だったこともあり、自分の英語スキルで周りについていけるか不安だったが、レベル分けテストによって同じくらいのレベルの人たちと一緒に授業を受けたため、安心感のある中で英語のアクティビティを楽しむことができ、渡航前より英語の楽しさを感じる事が出来た。また、私は、スピーキングに関して自信がなかったが、授業内で沢山スピーキングに関するアクティビティを行ったため、少しは成長することが出来たと感じ、特に渡航前と比べて会話の中でのリスニング力を高めることができ、相手の人が伝えたいことを理解する能力が向上したと感じた。渡航前は、特にスピーキングの能力を向上させたいと考えていたが、授業内で多くの新たな語彙を身につけることができたため、語彙やフレーズの知識を持つことの重要性や、語彙の知識をつけ、会話の中で使用することの楽しさを感じる事ができ、さらに新たな語彙を身につけたいと感じるようになった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学の中で、会話の中でのリスニング力やスピーキング力が短期間ではあったが、上達することが出来たように感じ、日常的に英語に触れ、英語を使用する生活を行うことの重要性を感じた。そのため、日本で暮らす中でも、担任の先生に教えてもらったリスニングやリーディングのトレーニングをすることができる web サイトを活用して学習を行うなど英語に触れる時間をつくって英語の学習を進めていきたいと思う。アイルランドと異なって日本では受動的に英語に触れることが難しいため、自ら日常の中で英語に触れる時間をつくることで、今回の留学経験を無駄にせずさらに自分の英語力向上させるために生かしていきたいと考える。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	H.N	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
コース名	第2クォータープログラム		
期 間	2026年 8月 1 日～ 2026年 8 月 30 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

配布された教科書の1レッスンを一週間かけてくまなくやっていく授業であった。私のクラス(B1+)で触れたレッスンは8、9、10の三つであり、各レッスンに speaking, reading, grammar, listening, vocabulary, writing の要素が組み込まれており、毎週金曜日には各クラスのレベルのその週に扱った内容についてのテストを行っていた。テストはケンブリッジ大学と書いてあるもので、試験時間は30分から1時間程度でそのクラス全員が終わったことが確認でき次第終了、というやりかたであった。テストは listening, vocabulary, reading, grammar の4項目であり、writing は別の曜日に授業で書いたものを先生に見ただけでテストはなく、speaking についてははっきりとしたテストはなく、日ごろの授業での発言を見られている感じであった。

授業はとにかくコミュニケーションが多かった印象である。教科書に載っているトピックについてその日隣に座っている人と話し合ったり、練習問題の答えをペアで確認しあったり、時にはロールプレイでペアワークをしたりなど黙々と勉強するというよりは、コミュニケーションを楽しみながら英語を学ぶ、といった授業スタイルだった。発言する時も基本的には名指しで当てられないので、わかる人がどんどん先生の問いの投げかけに答えていく感じだった。しかし、外国人の生徒を筆頭にどんどん発言するためそれに呼応するように日本人の生徒も多く発言しており、とても活気のある授業であった。毎週のように新しい生徒がクラスに来るので、そのたびにアイスブレイクのような自己紹介のゲームをさせてくれたり、教科書で触れている内容と関連のあるトピックで kahoot! というスマホでやる早押しゲームをやらせてくれたり、金曜日のテストの後には英語を使って楽しめるボードゲームを持ってきてくれたりなど楽しい授業だった。

課題はほとんど毎日だされるが10分程度で終わるくらいの問題を解くだけでそこまで大変ではなかった。週末には3分から5分のポッドキャストを作成する課題が一回出されたが、他の週末は課題はなく何も気にせずに観光ができた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

知識として持っていた単語のより自然なネイティブスピーカーの使い方を学べたのが個人的にはよかったと感じている。受験のために頭に叩き込んだ熟語が全部似ていて自分はすごく苦手だったけど、使い方やそのニュアンスを教えていただけたので以前より苦手意識がなくなった。

そして、外国の文化にも前より詳しくなれた気がする。教科書にでてくる THE COLOR RUN というイベントはすごく印象に残っているし、デンマークの ROSKIRDE というお祭りやメキシコの COMUNITE FESTIVAL、日本の FUJI ROCK FESTIVAL など知らなかったし、日本にいたら一生知る機会のなかったようなイベントについても学べたのがすごくよかった。

反対に文法や語彙については日本でやったことのある内容ばかりでありあまり新しく得た知識はないと感じた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

最初は英語を話すことが恥ずかしくてペアワークでも少し日本語を話してしまったり、全体でも誰かが発言してくれるのを待っているだけだったり、文法を間違うのが怖くてあまり話せなかったりと英語に対して消極的であった。しかし、同じクラスにいた韓国人の子とペアワークをするときなどはつたない英語でも口にしないと通じないという状況であったため文法などは気にせず話していたら、自分が思っている以上に文法はあってなくても会話はできるということに気づけた。そのことに気が付いてからはミスを恐れずに話せるようになったし、全体の発言でも間違いを恐れずに自分の意見を言えるようになった。英語を話すことに抵抗を感じなくなったのだ。このことが自分の 1 か月の留学における大きな成果だと感じている。

(4) 今後はどう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

私は高校生の頃からずっと将来キャビンアテンダントになりたいと考えている。そのため、この期間に培った英語力を駆使したコミュニケーションで、将来観光に来た外国の方が少しでも安心して日本やフライトを楽しむためのお手伝いが出来たらいいなと思っている。そのためにも自分に特に必要な力はスピーキング能力であると感じたため、大学でやっている国際交流のプログラムなどに積極的に参加し、英語でしかコミュニケーションが取れない人との会話の機会を作っていきたい。そして一か月の留学を無駄にせず成果を目に見えるものにするために、TOEIC などの英語の能力試験を受けて就職活動に有効なものにしたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	K.H	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	学部2年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	2Qプログラム		
期 間	2026年 6月 27日～ 2026年 8月 24日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

留学前に受けたオンラインでのテストの結果を基にレベル別にクラス分けがされ、16人ほどのクラスで授業を行いました。授業の時間は、9時から13時までで間に20分間の休憩がありました。初日のオリエンテーションで配られた教科書を元に授業が進んでいく形で、先生が独自につくったプリントなども元に進められました。最初の一週間は教科書に書き込みができないため、ノートやルーズリーフを用いて授業をうけました。私のクラスの先生は、アイルランド出身の先生でしたが、様々なルーツを持つ先生がおり、先生の入替わりもありました。教室も一週間ごとに異なり、メンバーも替わるので、スペインや韓国、イタリア、メキシコ、日本からの留学生と同じクラスで学びました。授業は、リスニング、リーディング、スピーキング、ライティング、文法と4技能をまんべんなく学ぶことが出来ました。グループワークやペアワークが中心で、スピーキングや文法を伸ばすことが出来ました。職業、音楽、住んでいる場所、都市や田舎の暮らし、映画、広告、家族についてのトピックを扱い、それぞれの国での文化の違いを共有することができました。印象に残っている授業は、先生が持ち込んでくださった話題ではありますが、アイルランドの伝統的な歌について歌詞の穴埋めを考えながら歌ってみたり、アイルランドの20分程度の映画をみて、その映画の構成や主人公の気持ちの変化や映画全体の伝えたいことについてディスカッションしながら考えたりするという授業がありました。スマートフォンを使って、blooketやkahootなどで復習のようなゲームを行うこともありました。また、ある一つのお話があり、それを細かくしたカードが全員に配られて、みんなで話し合いながら並べ替えるといった授業もありました。ライティングについては、毎週一回、その週のトピックに沿ったことについて120字程度で授業内に書いて提出し、先生が添削をして返却をしてくださるという流れでした。毎週金曜日にその週の確認をするようなテストがあり、テストの結果によっては、レベルアップのためのテストを受けることもできました。課題は教科書やプリントの文法の問題を解いたり、ライティングを書いてきたりといったもので短時間で終わるものばかりでした。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を受けて、一つの単語についても動詞、形容詞、副詞、名詞など複数の活用について学ぶことができたり、ネイティブがよく使う熟語やフレーズについて学ぶことができました。単語については、受験を意識した単語の勉強ではなく、トピックに応じた単語を体系的に学ぶことができ、その週の中で何度も様々な使い方で出てきたため、自分でも使っていくなかで覚えることができました。クラスのレベルが高くなかったため、基本的な文法事項である、完了、動名詞、不定詞、must、have to、need、仮定法や used toなどを英語で学ぶことができ、今まで難しく考えてしまっていたが、英語でネイティブが学ぶ方法で学んでみるとすんなり入ってくる部分もあり、新たな概念として再確認することができました。ライティングでは、今まで習ってこなかった書き出しや、フォーマルやインフォーマルな場面などでのかき分けなども学ぶことができたため、自分のものにできるようにしたいと考えました。日本人以外の留学生との会話を通して、その国の文化や慣習などを学ぶことが出来ました。アイルランド人の先生を通して、伝統的な音楽や楽器、スポーツ、有名人、食事、歴史などを学ぶことができました。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、自分から発言したり、考えを伝えたりすることに対して、準備しないと伝えられなかったり、ためらってしまう場面もありました。中学や高校などでも同じようなトピックで授業が進んでいましたが、社会問題だけではないトピックの中で文化の違いを学ぶことができ、自分のこれまでの経験を異なるバックグラウンドで生活してきた人々に伝えるという経験をする事が出来ました。自分が当たり前だと思っていた価値観などについても 180 度転換するようなことがあり、他の留学生との交流や授業を受ける姿勢をみて、日本との違いを感じることができました。自分が疑問に思ったことについて質問する姿勢や、自分の話を織り交ぜながらも会話を続けていく姿勢なども今後、様々な人と関わっていく上で英語でのコミュニケーション以外でも必要なスキルを身につけることができたと考えています。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今後について、授業やホームステイ先で英語での生活を経験したため、英語の学習を続けながら、スピーキング力を維持、向上させたいです。教職課程を履修しているため、授業の進め方や英語の文法や単語などの知識面などについても参考にしながら、日本で学んできた学び方をアップデートしていけるようにしたいです。また、日本以外の国からきた留学生の方々との交流を通して、今まで他の国に対する知識などがまだまだ足りないと感じたため、国際交流や授業でのボランティア、英語での授業や国際関係の授業を通して学んでいきたいと思いました。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	S.H	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	英語語学研修		
期 間	2026 年 8 月 3 日～2026 年 8 月 28 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

私は、8 月 3 日から 8 月 28 日の 4 週間ダブリンシティユニバーシティにて英語の語学研修に参加し、英語の 4 技能の向上に取り組んだ。渡航前にテストを受講し、そのスコアに基づいてクラス分けが行われ私は CSE スコアが B1 目安の intermediate のクラスに組み分けられた。授業は平日のみで、9 時から 13 時まで行われ、1 時間 50 分授業があり、20 分休憩後また 1 時間 50 分授業というような感じだった。PE の授業の雰囲気とほぼ内容は同じであり、クラスは、多少変動があったものの 20 人前後のクラスで韓国人が一名いたが、横浜市 4 人を含む他大学の日本人生徒であった。月曜日から木曜日は教科書の内容に沿い、リーディング、スピーキング、ライティング、リスニングを 4 技能バランスよく学習した。教科書は毎週 1 章ずつ進み、食生活、家族、貨幣、教育、交通、固定観念、マナーなどの多種多様なテーマを通して 4 技能を学んだ。リーディングやリスニング、ライティングはほとんど教科書の内容に沿い、教科書にある問題をみんなで取り組むような感じだった。私のクラスはゲームやアクティビティを通して文法や語句、スピーキングを行う機会が多かった。1 日計 3 時間 40 分ある授業の中で半分かそれ以上の時間あったように感じる。内容は様々でグループで協力して英単語や文を並べ替えるものや、英語での人生ゲーム、ペアでお題に合わせた英語のフリートークなどであった。特に人生ゲームでは止まったマスに教科書で勉強している内容のお題が書いており、そのお題に対して話すというようなものであり、英語で 3～4 人と話しつつリスニングやスピーキングができ楽しみながら学ぶことができた。毎週金曜日にはテストを行い、習熟度を確認する機会となった。テスト内容はその週に学んだことだった。少し難しく感じたが授業内容を復習すれば比較的容易に溶けるように感じた。私のクラスは課題が全く出ず 4 週間のうち一回しか出なかったが、クラスによってまちまちであり、毎日課題が出されているというクラスもあったと聞いています。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を受ける中で特に得られた知識は語彙や文法である。文法をしっかりと学んだことも久々であり、現在完了形や助動詞など多岐にわたることを学んだが、復習という気持ちよりも、抜けていた文法事項の補填をしっかりと行うことができた。特に直近の未来の予定を表す際に現在進行形を用いる点は忘れていたこともそうだが、あまり日本語の感覚になく驚くとともに新鮮な気持ちで学べた。また私が留学したダブリンシティーユニバーシティーのあるアイルランドはイギリス英語が使われており使われる単語や話し方は基本ブリティッシュ・イングリッシュだったため、特にリスニングと単語において新しく学ぶことが多かった。subway を the underground と言ったり elevator を lift と言ったり、発音も can't がアメリカ英語と違ったりなど、アメリカ英語を何年間もベースに習っていたものからすると、少し慣れなかったが、学ぶことが多く楽しく、世界が広がったように感じた。アイルランドはイギリスの影響も受けつつ独自の文化を築いており、先生が頻繁に話してくださったアイルランドの文化や習慣は新たな学びになるとともに、日本や韓国との文化と比較でき違いや良い点などの再認識につながった。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

ダブリンシティーユニバーシティーでの一か月間の学びを通して私は積極性や自己表現の方法が身につくように感じる。日本では自我を出すと同調性圧力のようなもので白い目で見られたりするケースが多く、委縮してしまい英語を話す際は小声になってしまったり、そもそも発言できなかったりなど自分のスキルを存分に生かせていなかったように感じる。しかし授業ではみんな些細なミスは気にしなかったり、意見が違っても受け入れてくれたりなど、お互いリスpektを持ってお互いに向き合える姿勢をもって授業を受けることができたため、積極的に自己表現を行うことができるようになった。またどのような言い回しをすれば自分の意見を分かりやすく簡潔に伝えられるかなどを話し始める前に、頭の中で考えてから発言でき、分かりやすく伝えられるようになった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学は語学習得の機会ではなく、異文化の価値観や社会構造を体感的に理解する重要な契機となった。授業を通して英語 4 技能を伸ばすことができ、特にスピーキングの面では異なる文化圏で生活する中で、コミュニケーションの前提や常識が大きく異なることを実感し、分かりやすい自己表現の大切さを学び身に付けることができた。主体的に学び、行動しなければ何も進まない環境で得た積極性は、今後のゼミ活動などの学業面や社会で働いていく面で強く生かしていきたい。英語は学ばなければどんどん抜けていってしまうため、英語の資格習得を目標に置きつつ、勉強習慣を続けていきたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	N.F	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
コース名	第二クォータープログラム		
期 間	2026 年 6 月 27 日～ 2026 年 8 月 24 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業や課題などは各クラスの先生のやり方で異なるが、どのクラスも英語で英語の文法を学ぶという大筋は同じだった。内容は中学や高校で学んできた内容の復習が多かったが、ネイティブの先生に学ぶことで英語を英語で理解する姿勢がついたり、日本人が日本語の感覚で理解している英語をネイティブの感覚で学んだりできた。私のクラスは授業の最初にその週に学ぶ文法のクイズ「blooket」を、スマートフォンを使って毎回行った。ゲームは四択問題になっていて、ポイントを競うものとなっていた。そのためより楽しみつつ集中して文法を学ぶことができた。授業内では自由に発言を求められる場面が多く、生徒たちの理解度に沿って進めていってくれている印象が強かった。また、授業内ではグループワークが中心だった。教科書に沿って意見をディスカッションしたり答え合わせをしたりした。私のクラスは日本人が多かったが、休み時間以外の授業中のディスカッションは英語でしていた。また、アイルランドの文化もたくさん教えてもらった。アイルランドのスポーツや俳優、楽器などについて知ることができた。毎週金曜日には確認テストがあり、2 週連続で 80%をとるとレベルアップテストを受けることができ、それに合格するとクラスアップをすることができる。この毎週のテストの実施方法も先生によって違ったが、評価されるのは、writing,listening,speaking,vocabulary,grammar,reading の 6 つのポイントで、アベレージが 80%を超えるとレベルアップテストを受けることができる。私のクラスでは speaking は先生が授業中の生徒の活動を見て評価してくれたが、他のクラスは先生と一対一で話すところもあった。テストのおかげでどの技能も伸ばすことができたと思う。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

まずは忘れていた高校英語の文法の復習をすることができた。仮定法や過去形、大過去など苦手な範囲や記憶の危うい範囲の復習ができた。そして学んだあとにその文法を使ってライティングで書いたりスピーキングで話したりすることでより定着した。また、語彙も学ぶことができた。例えば wage と salary の違いなど、細かい使い分けを学ぶことができた。クラスには様々な国籍の人がいて、それぞれの発音の癖も感じることで面白かった。また、アイルランドの文化についても知ることができた。アイルランドで有名な楽器やスポーツなどを学んだ。また、教科書には様々な内容があって、英語だけではなくスポーツのことや世界の料理などについても学ぶことができた。質問をするときもちろん英語なので、自分の意図を英語で説明しなければいけない場面があり、スピーキング力がかなり上がったと思う。わかってもらえるまで言い方を変えて説明したり、その度に新しい単語を調べたりすることで英語力をさらに深めることができた。また、分からないことは聞く、挑戦することの大切さを学び、また勇気や自信も身に着けることができたと思う。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前はとにかく自分の英語力に自信がなかった。1 年後期から英語の授業を履修していなかったため単語も文法もほぼ忘れていたし英語を話すことも慣れていなかったため、ついていけるかやホストファミリーと会話できるかとても不安だった。しかし、授業を受けた後の今の自分はそんな不安を感じる必要はなかったなと思った。日々の積み重ねでだんだん英語を思い出していくし、英語を使わざるを得ない状況だったため、英語で話す癖がついたり日常会話に出てきやすい熟語や単語を知ったりすることでだいぶ英会話に慣れたと思う。また、最初は間違えるのが恐くて発言も会話も自分からはほとんどできなかったが、今ではわかっているのに答えないのが悔しくて自分から発言できるようになった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

英語で話す習慣がついたため、これが廃れないようにオンライン英会話を始める。また、継続して TOEIC を受けたり、大学でも英語に関連する講義を受講したりするようにする。また、英語だけではなく、得た自信や勇気も継続できるようにする。大学の講義で自ら発言できるようにしたり、新しいことに挑戦したりしていきたいと思う。また、これを機により海外に興味が出たため、いろいろな国に行き、そしてその地でも英語を使って会話をしてみたいと思う。単語や文法などの教科書を使った座学とオンライン英会話や海外の方と関わることでできるベントの参加など積極的な活動もしていきたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	N.A	学部・学科	国際商学部・国際商学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティーユニバーシティ		
コース名	General English		
期 間	2026 年 6 月 29 日～2026 年 8 月 21 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業は平日の朝 9 時から午後 1 時まで行われた。クラスのメンバーは頻繁に入れ替わり、時期によって国籍のバランスは様々だった。授業内で他校の日本人、フランス人、スペイン人、メキシコ人、サウジアラビア人、韓国人の学生と関わり、15 人の少人数クラスであった。金曜日は週テストが行われた。授業を受ける中で特に圧倒されたのは、他の国の学生が積極的に授業内で発言していたところである。「なぜこの答えは違うのか」、自分の意見も伝え、Speaking の文法が間違っているにもかかわらず、積極的に発言する姿に自分自身も奮い立たされた。様々な国の人が集まるので、国によって英語のアクセントが異なっており、最初は相手が何を話しているのかを理解することにとても苦戦したが、ペアワークが多く徐々に話している内容も理解でき、自分の言いたいことも話せるようになった。クラスみんなで授業をつくっていくアクティブな授業形式で、授業中はひたすら教科書通りに進むのではなく、Kahoot! やすごろく、文法クイズなどちょっとしたミニゲームがあり、楽しく英語を学ぶことに加えて、クラスメイトとコミュニケーションをとるきっかけにもなった。週末の課題も食べ物の写真などを撮ってきて、それを隣の席の人に内容を説明するなどで、話すきっかけにもなり、日常会話も実際に学ぶこともできた。ライティングの課題は、好きな新聞記事の要約と新しく学んだ単語を書くものだった。授業ごとに学ぶトピックが違い、ボキャブラリーでは中高で学んだアメリカ英語ではなくイギリス英語での言い方や現代的な言い方も学んだ。印象に残った授業は、指定された単語の中から選択し、その単語を使って短い小説をグループごとに協力して創作する授業だ。起承転結や面白さを取り入れ、正しい文法や文章を考えるだけでなく、楽しく学ぶことができた。また、ランダムで指定される頭文字のアルファベットから始まる国名やスポーツなどを、グループごとに時間内に考え、被らないように勝負するゲームでは、知らなかった単語やすぐ思い出せない身についていない単語を学べたり、他の国の新しいものを学べたり、また心理戦としてゲームとしてもクラスメイトと楽しみながらやることができ、印象に残っている。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

今まで習ってきた文法を、英語で再度学ぶことでネイティブの方が英語をどのように理解して使っているのかを知ることができ非常に興味深かった。また、テーマに関連した英単語や熟語、それらの意味や定義を英語で理解することでより自然に英単語の意味が身についた。わからないことがあり聞きたくなかった時も、質問する相手も他国のクラスメイトなため英語でそれも説明しないといけず、自分がわからない部分が明確になり、それを伝わるように質問や答える力も身についた。様々な国の生徒と会話をする中で、アクセントの違う英語や他国の文化も学べた。彼らの自ら積極的に自分の意見を発言する姿勢から学ぶことも多かった。ペアワークやグループワークを何度も行ったことにより、自然とスピーキング力が向上した。アクティブラーニングを通じて、新たな知識を覚えるだけではなく実際に自分で使う練習を繰り返すことでより知識が定着しやすくなったと実感した。また、英語で学習することで、英語で考える力を養うことができた。これらのことを、留学を通して学び得ることができ貴重な経験となった。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、英語を聞き取れるか、会話が成立するのかなという不安や心配が大きかった。しかし、普段日本で関われないヨーロッパ圏の人たちと話してみたいという気持ちが大きく、先生が提供してくれたペアワークやちょっとした雑談も試みたことで、コミュニケーションをとることへの抵抗感が減った。最初のころ日本人が少なかったこともあると思うが、頑張って聞き取るしかなく聞き返すことも多々あったが、みんな親切で単語が上手く出てこなくても言いたいことを当ててくれて会話ができ、案外勇気を出して頑張れば会話は成立すると実感した。授業ではクラスメイトが一生涯懸命発言していたこと、クラスの「間違えても大丈夫」という雰囲気、そして先生が間違った文法でも言いたいことを理解してくださるだけではなく、正しい言い方を教えてくださったことから、少しずつ積極的に質問などもできるようになった。この留学プログラムを受けた後では、リスニングやスピーキングに対する抵抗感が減り、前より自信がついた。何事も挑戦して頑張ってみるものの重要性を身に染みて体験することができた。この挑戦する力と能力を大切に、今後の学生生活に活用していきたいと思う。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

この期間で特に身についた能力は間違いなくリスニング力とスピーキング力である。8週間というわずかな時間であったが、この得た能力を糧として普段から英語に触れる環境を作り、TOICE なども頑張りここで得たネイティブの英語に触れた経験を無駄にしないように頑張りたい。また、大学での留学生のボランティア活動など英語を話す時間も大切に、実際に英語を使う場面を以前より増やしていきたい。8週間のアイルランド留学をただ思い出として心にしまっておくのではなく、この時間で得たものからさらに発展させて、今後の大学での自分の学びにつなげていきたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	N.I	学部・学科	国際商学部国際商学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティ大学		
コース名	第2クォータープログラム		
期 間	2026 年 8 月 1 日～ 2026 年 8 月 31 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

私は、ダブリンシティユニバーシティにおいて、4 週間の英語の語学研修に参加して、英語力のリスニング、スピーキング、ライティング、リーディングの 4 技能の向上を目指し、参加した。大学の授業開始初日に、レベルごとにクラスが分配され、クラスのメンバーは夏休み期間ということもあり、大多数が日本人で 1 名韓国人の生徒がいる 20 人弱のクラスであった。クラスメンバーの変更は特になく、4 週間の中で途中に数名が卒業、入学がある程度であった。授業は、平日の午前 9 時から午後 1 時までの 4 時間で行われ、途中で 20 分ほどのブレイクタイムが挟まれていた。授業内容は、授業で扱う内容で先生が抽出したトピックを選択し、ペアやグループで質問、トークを行うといったスピーキングの時間が多くあった。その後、先生を含め、全体でトークを大きく行い、先生に質問を投げかけたり、先生からアイルランドの文化と日本の文化の違いを学んだりした。大まかに週ごとに時制、現在完了形、冠詞、前置詞を学んだ。教科書で文法が使用された文章を読み、それに関する質問について話し合い、その後、リスニングを聴き、重要な文法や単語、表現を先生がわかりやすく説明して下さり、実際に活用できるかペアや順番に解答しあう練習があった。その週の文法やトピックに関するライティングの練習もあり、表現の確認など先生の添削もあった。週に一回、金曜日にはテストが行われ、その週に学んだ文法や単語表現についての内容だった。スピーキングテストでは、ペアの子といくつかの質問について先生の前で会話を行うもので、先生からその場で表現の確認や指導も受けることができた。テスト後の時間や、時間がある日には、授業に関する内容のすごろくゲームやスマートフォンを用いたチーム対抗賭けゲームなど友達と協力して英語での会話を含みながら楽しめる時間もあった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

今回の 4 週間の授業を受け、私は特にリスニング力の向上を感じた。オールイングリッシュの授業では、最初は先生の説明に対してあまり理解することができず、受け身の体制になってしまっていたが、授業にも慣れ、耳で聴くことに対して苦に感じるものが減り、授業に対して理解を深めながら、楽しんで参加することができるようになった。文法の面においては、かつて学んでいた文法の表現の基本的な部分の確認はもちろん、くだけた表現や実践的な文法の使い方の知識を得られた。授業内でのトークでは同じ日本人の中でも地域による違いや先生のアイルランドの文化の特徴など、様々な発見、新たな知識を吸収することができた。先生がアイルランドだけではなく、他のヨーロッパ国やインターネットを使いながら面白い例や特徴的な事例を提示し、常に日本の文化との違いに驚きながらマナーや表現の違いについて学んだ。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

私は、授業を受け始めでは、内容をあまり理解していないまま周りに合わせてしまっていた傾向にあったが、他の生徒の失敗を恐れない積極的な姿勢や発言力、先生やクラスの明るく元気な雰囲気から、授業に慣れたころには、負けじと積極的に発言する機会をかなり増やすことができるようになった。グループの活動の際には、メンバーの発言に対して、常に疑問を持つ姿勢を取り、会話を広げたり、トピックを広げたりする力を大切にした。時には、全く違う内容のトークになってしまうほど、積極的に会話に参加し、とにかくたくさんの会話を行うことを心がけた。クラスメートとは、年齢も異なったり、大学も全く違うメンバーではあったが、積極的に話かけたり、ブレイクタイムで砕けた会話も行ったりしたことで、壁を感じることは全くなくなり、とても楽しく授業を受けることができた。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

私は、今回の経験を通して、物事に対して、挑戦してみる積極性を得ることができたと感じる。海外という日本と異なる文化の環境下の中、自分で考え、わからないことに対してどのように対策をとっていくのか、柔軟に対応していく力の重要性や、実行できたという経験は自分の中で大変大きな価値を得ることができた。また、国境を越えた様々な人とのコミュニケーションの難しさや異文化の尊重など学ぶ場面も多くあり、今後の社会生活の中においても得た能力を意識していきたい。今回得た英語力をより向上させるため、自ら英語に触れる機会を増やし、今後も英語の学習に励みたいと思う。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	A.O	学部・学科	国際商学部・国際商学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	第2クォータープログラム		
期 間	2026 年 8 月 1 日～ 2026 年 8 月 31 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

ダブリンシティユニバーシティでの授業は、午前 9 時から午後 1 時まで、途中 20 分間の休憩を挟んで行われた。クラス分けは留学前に受けたテストの結果によって決められており、クラスごとに英語のレベルや使用する教科書も異なっていた。私のクラスは、当初は日本人 16 人と韓国人 1 人の計 17 人で、途中からは日本人 17 人で授業を受けた。

毎週金曜日には、語彙、文法、発音、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングを含むテストが一日かけて行われた。通常の授業では、初めに先生と前日の出来事や週末に何をしたかについて会話する時間が設けられ、その後、教科書の問題に取り組んだ。授業は基本的にシラバスに沿って進められていたと感じた。教科書では、動画を見たり音声を聞いたりするリスニング、リーディング、各章のテーマに関連した語彙、スピーキングの練習となるディスカッション、ライティングなど、様々な活動を行った。

ディスカッションでは、2 人または 4 人のグループに分かれて活動した。毎回同じ人とペアやグループにならないよう、授業中に席を移動することが多かった。そのため、クラスの仲間全員と英語で会話する機会ができ、様々な人と交流することにつながった。私のクラスでの課題は、リーディング問題や教科書の問題を解くものが中心で、頻繁に出されるわけではなかった。

その日の教科書の内容が終わると、復習を兼ねて先生が自作したウェブ上のゲームを、4～5 人のグループで行った。例えば、アルファベットを並び替えて単語を作るゲームや、単語を並び替えて文章を作るゲーム、意味が似ている単語を選ぶゲームなどがあり、学んだ内容を瞬発的に思い出す必要があったため、楽しみながら効果的に復習することができた。また、すごろくのようなゲームを使い、提示されたテーマについてグループ内で会話する活動も行った。テーマにはその日の章で学んだ文法が使われており、文法の復習だけでなく、実際の会話の中で使う実践的な練習にもなった。

文法では、時制、現在完了形、比較級・最上級、冠詞、助動詞などを学習した。文法の細かな違いについては、先生が生徒のさまざまな例文を取り上げながら説明していたため、単に文法のルールを覚えるだけでなく、実際の使い方を理解することができた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

ディスカッションや教科書の答え合わせをする中で、短縮形を使う方が自然な場合があることを学び、ネイティブスピーカーの話し方についても理解を深めることができた。また、過去形を発音する際に「-ed」の発音が曖昧になることが多く、先生から直されることが頻繁にあったため、正確な発音を意識するようになった。

強意形容詞を学習した際には、感情やジェスチャーを加えて練習した。うまく感情を込められないと何度も繰り返すように言われたが、繰り返し発音し、感情を込めて練習したことで、復習する際にも単語のイメージが浮かび、覚えやすくなったと感じた。感情を込めて例文を読むことは難しく、何度も直されたが、この練習によって実際の会話でも感情を表現しながら英語を使うことにつながると感じたため、今後も継続したい。

授業後半のゲームでは、学んだ文法を使って質問文を自分で考えたため、語順を考えながら英文を組み立てる練習になった。同じ文型を何度も考えることで、瞬発的に英語で会話する力も鍛えることができた。ライティングでは、教科書の文を書き写すことで、正しい文法や語順を学ぶことができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、英語で積極的に発言することに不安があり、間違えることを恥ずかしく感じることもあった。しかし、私のクラスは日本人が多かったものの、積極的に発言しなければ会話に参加できず、置いていかれるような感覚があった。特に、初日から積極的に間違いを恐れず全体の前で発言する人が限られていて、最初から臆せず発言することが大切だと気づいた。授業を受ける中で、間違いを恐れるよりも、自分から発言して英語を使うことの方が重要だと感じるようになった。

また、Yes/No で答える疑問文では、「Yes」「No」だけで終わらせるのではなく、その後に簡単な一言を付け加えることで、会話を続けたり、新たな話題につなげたりできることを学んだ。このことから、英語で会話をするときは、質問に答えるだけでなく、相手が話しやすくなるような返答を意識することが大切だと感じた。これは英語に限らず、どの言語で会話するときにも意識したいことであり、今後のコミュニケーションにも生かしていきたい。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今後、大学の授業で授業の最初から積極的に発言することを意識し、他の人の様子をうかがうばかりでなく、自分の考えを発信する姿勢を大切にしたい。また、今回の授業を通して、英語の知識を実践的に身に付ける方法をいくつか学んだため、それらを参考に実際の会話で活用できるように練習していきたい。さらに、この留学をきっかけに英語学習を継続して続けていきたい。留学中ネイティブスピーカーの話す英語を聞き取れない場面があったため、特にリスニングに力を入れて、英語の音声を聞く機会を増やすことで、聞き取る力を伸ばしていきたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	S.K	学部・学科	国際商学部国際商学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	Dublin City University		
コース名	General English		
期 間	2026 年 6 月 29 日～2026 年 8 月 21 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

Dublin City University における 8 週間の General English プログラムでは、英語の四技能を総合的に伸ばすことを目的とした、実践的で参加型の授業が行われていた。授業は少人数制で、学生同士で意見を出し合いながら進められることが多く、発言の機会が多い点が特徴的であった。特に印象に残っているのは、optimistic、well-organized、critical などの人の性格を表す語彙を学んだ週のグループワークである。この課題では 4 人グループに分かれ、架空の事業を立ち上げた上で、6 人のチームメンバーの性格や人間関係を設定する活動に取り組んだ。私のグループは organic candy の製作会社を設定し、リーダーは competitive だが disorganized、財務担当は reliable だが pessimistic、販売責任者は well-organized だが unsympathetic といったように、それぞれの長所と短所を組み合わせる人物像を考えた。また、リーダーと財務担当は対立している一方で、財務担当は他のメンバーとは良好な関係にあるなど、人間関係についても具体的に話し合った。単に単語を暗記するのではなく、実際の状況の中で使うことで、語彙の意味や使い方への理解が深まったと感じている。

また、本プログラムでは weekly score として、授業中の発言に基づく speaking 評価、定期的な writing 課題、そして毎週金曜日の reading・listening・vocabulary・grammar テストの結果が総合的に評価されていた。このスコアが 2 週間連続で 80% 以上の場合、上位レベルに進むための level progress test を受験することができたが、私のクラスでは自分から講師に受験したい旨を伝える必要があった。そのため、条件を満たした際には自ら申し出て受験し、試験に合格することができた。その結果、上位のクラスに進むことができた。最初のクラスでは日本人学生が多い環境であったが、同じクラスにはスペインで教師として働いている学生もおり、彼らは体育や数学、ビジネスなどさまざまな分野を教えていた。彼らが授業中に疑問点があればすぐに質問し、積極的に発言する姿勢に刺激を受け、自分も間違いを恐れず発言することを意識するようになった。また、上位クラスでは外国人学生が多く、その中でもスペイン人教師が多い環境で授業を受けることができ、母語や年齢、文化背景の異なる人と英語で交流する貴重な経験となった。このように、本プログラムを通して英語力の向上だけでなく、自ら行動することの大切さや、多様なバックグラウンドを持つ人と関わることの意義を実感することができた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

本プログラムを通して、語彙や文法といった基礎的な英語力に加え、それらを実際のコミュニケーションの中で適切に使う力を身につけることができた。特に、英文法や英単語の意味・ニュアンスの違いについて英語で説明を受ける機会が多く、日本で学んできた知識を新たな視点から理解することができた点が印象的である。例えば、日本では難解に感じていた過去完了形についても英語でその背景や使われる状況、時間関係のニュアンスを説明されることで、より深く理解することができた。

また、毎週の reading や listening のテストを通して、文章や会話の要点を素早く把握する力も養われた。さらに、授業中の発言が評価に含まれていたため、自分から積極的に発言する姿勢の重要性を実感した。最初は自分の英語に自信が持てず発言をためらう場面もあったが、間違いを恐れずに伝えようとすることで理解が深まると気づき、次第に主体的に授業へ参加できるようになった。

加えて、異なるバックグラウンドを持つ学生との意見交換やホストファミリーとの会話を通して多様な考え方に触れることができた。相手の意見を尊重しながら自分の考えをはっきり伝える経験は、英語力だけでなくコミュニケーション力の向上にもつながったと感じている。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

留学前は、自分の英語がどこまで通用するのか分からず、不安や緊張を感じていた。また、授業中に発言することに慣れておらず、「間違えたら恥ずかしい」といった気持ちから、当初は受け身な姿勢で授業に臨んでしまっていた。しかし、発言が評価の対象である環境に身を置いたことで、「間違えないこと」よりも、単語が分からない中でもどのように伝えるかという「伝えようとする姿勢」が重要であると気づいた。また、ペアワークでは発言しなければ活動が進まない場面も多く、自然と英語を話す機会が増えていった。その結果、徐々に発言への抵抗感が薄れ、自分の英語に対する不安も軽減された。さらに、実際に英語を使って意思疎通ができた経験を通して、自分の英語にも通用する部分があると感じられるようになり、英語でコミュニケーションを取ることに自信につながった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学を通して、間違いを恐れずに積極的に発言する主体性の重要性を実感した。そのため後期から始まるゼミ活動では、自分の意見を発信する力のさらなる向上を目指すとともに、相手の意見を尊重しながらも自らの考えを積極的に発言し議論を深める姿勢を大切にしたい。さらに、TOEIC に向けた学習やアルバイト先での外国人観光客への接客を通して、日常的に英語に触れる機会を設けることで、語学力のさらなる向上を図りたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	K.Y	学部・学科	国際商学部国際商学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	General English		
期 間	2026 年 6 月 24 日～ 2026 年 7 月 24 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

最初のオリエンテーションでクラス分けが発表され、各クラスは 10 人前後の少人数で編成されている。私のクラスには韓国、スペイン、フランス、ブラジル、メキシコと様々な国籍の学生が在籍しており、年代も幅広かった。授業は午前 9 時から午後 13 時まで授業が行われ、金曜日にその週の確認テストが行われた。教科書にそって Listening・Writing・Reading・Grammar・Vocabulary を学習した。教科書には、環境問題、自然災害、能力や性格など幅広いテーマが扱われており、それぞれのテーマに関連する語彙や熟語を学び、内容に沿ったディスカッションを 2-3 人のペアで行った。ディスカッションでは他国の学生とペアを組み、それぞれの国の文化や生活習慣、特有の動物や食べ物など教科書のテーマごとに教え合い、会話が弾んだ。Grammar と Vocabulary は教科書の問題演習に加えてミニゲームや Quizlet を使ったクイズに取り組んだ。Quizlet はチームで協力してオンライン上の問題を解く学習であり、ゲーム感覚で楽しく覚えることができた。教科書の問題演習では隣の人と答え合わせをし、自分がなぜその答えを選んだのかという理由を言い合った。その後先生を含めみんなで答え合わせをした。なんとなく選ぶのではなく根拠をもって解くという癖をつけられたと思う。また、一人ずつある単語が書かれた紙を引き、その単語を使って物語がつながるように文章を言うというアクティビティが印象に残っている。その単語を覚えられだけでなく、前の人が言った文章を理解しすぐに文章を話さなければならず、Listening・Grammar・Vocabulary・Speaking など様々な能力が身につけられたと感じた。他にも、授業の中ではアイルランドで日常的によく使われる英語表現を学んだ。例えば *Grand!* (素晴らしい)、*Deadly!* (最高)、*Thanks a million.* (本当にありがとう) など、教科書には載っていない現地ならではの言い回しを先生から教わった。こうした表現を知ること、アイルランドの文化やコミュニケーションの雰囲気をより深く理解できたと感じている。課題は毎回プリント 1 枚分ほどの課題で、教科書の文法問題やライティング、次の授業に行くミニプレゼンの準備をした。答え合わせは次の授業にみんなで確認し、わからないところは質問するという形式であった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を通して、英語を英語で学ぶという環境ならではの学びを得ることができた。文法も日本語ではなく英語で説明されるため、present (現在形)、present perfect (現在完了形) など、文法名そのものを英語で理解できるようになった。英語の文法を英語で捉えることで、これまで日本語で覚えていたルールが英語話者の視点で理解できるようになり、構造のイメージがつかみやすくなった。また、語彙もすべて英語で説明されるため、単語の意味を日本語に置き換えるのではなく、英語のまま理解する力が身についた。先生が例として挙げる類義語やニュアンスの違いを英語で聞き取ることで語彙の幅が広がり、より正確に表現できるようになったと感じている。さらに、他国の学生と話すことで、日本以外の文化や価値観、生活習慣について深く知ることができた。授業中のディスカッションでは、それぞれの国の食べ物、動物、自然環境、社会問題などを互いに紹介し合い、自分がこれまで当たり前だと思っていたことが国によって大きく異なることを実感した。英語を使って多様な背景を持つ人と交流することで、視野が広がり、異文化を理解する姿勢が自然と身についた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように(気持ちなどが)変化したか。(400 字程度)

授業前は実際に他国の人と話す機会が少なく、日本語が通じない人と話すことに不安を感じていた。しかし、授業を通して他国の人と話してみると、相手はつたない表現でも丁寧に聞いてくれ、間違いを恐れずに話すことで会話が自然に続いた。また、他国の学生たちが先生の問いかけにすぐ反応し、積極的に発言していた姿はとても印象的だった。授業を受け始めた時の私は、先生に指名された時しか発言することがなかったが、間違いを恐れずに、考えた答えや質問をすぐに発言するクラスメイトをみて、もっと積極的に話してみたいという気持ちが芽生えた。先生が何気なく話すことでも知らない単語や言い回しを注意深く聞き質問したり、ある生徒が答えに疑問を持っていた時に先生だけでなくクラス皆で解決しようといいあったり、一人ひとりの積極性が授業全体の雰囲気をも明るくしていた。授業は先生と生徒という関係だけではなく、皆で作っていくものだと感じた。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

授業で身につけた英語を英語で理解する姿勢を、今後の学習にも積極的に生かしていきたい。特に、英語の参考書や動画を英語で学ぶことで語彙がさらに増え、理解がより深まると感じている。また、就職活動に向けて TOEIC の勉強を進める予定である。短い 1 か月間ではあったが、毎日英語を聞く環境に身を置いたことで、これまで苦手だったリスニングが確実に伸びたと実感している。今後も英語の音声に触れる習慣を続け、授業で得た積極性と英語力を学業とキャリア形成に役立てていきたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	H.Y	学部・学科	国際商学部国際商学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	General English		
期 間	2026 年 6 月 27 日～2026 年 7 月 27 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

ダブリンシティユニバーシティでの留学において、まず留学前にクラス分けテストが実施された。平日は 9 時から 13 時まで授業があり、それ以降はフリーだった。クラス構成は約半分が日本人、それ以外が韓国人、スペイン人、サウジアラビア人、メキシコ人、中国人といった構成で、先生はブラジル人とスコットランド人であった。人によるが、私は、すでに授業が進んでいるクラスに途中参加という形で参加した。その週から開始のクラスの人もいた。授業は教科書に沿って進められ、理解度の確認を兼ねてゲームをしたりグループワークを行ったりした。教科書の内容は高校英語程度のものであり、毎週金曜日に長文読解や文法問題を含む筆記テストとその週の授業で出た単語を使ったスピーキングテスト、ライティングテストが行われた。ライティングは、自分が書いた文章を先生が添削して返却してくれた。2 週間に一度、プログレステストというものが実施されており、それに合格するとよりレベルの高いクラスに移籍できるという仕組みであった。私が所属していたクラスでは、課題として週に 2,3 回の頻度で文法問題が数問出された。授業は必ずしも教科書通りの固い内容ではなく、授業前にワールドカップのダイジェスト動画を見たり、雑談として学生や先生それぞれの出身国の文化や言語について学んだりした。基本的に和気あいあいと授業をしていたが、課題の答え合わせをするときなどは、高校生の時のように席順で当てられて答えていくシステムだった。

特に印象に残った授業は、グループでのプレゼンである。絶滅危惧種についてのプレゼンで、それぞれの出身国の動物について説明した。全員違う国籍の学生のグループだったため、資料を作成するときにテーマに対する認識がかみ合っておらず、自分の作ったスライドが消去されたり編集されたりすることがあったが、全員で方向性の確認をすることで最終的に何とかまとめて発表することができた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を受けて、アイルランドだけでなく様々な国の文化や言語に関する知識を得た。例えば、私が所属したクラスはスペイン語話者が多かったので、学校外でも耳が慣れ、内容は分からないがスペイン語を話しているというのは分かるようになった。また、アイルランドでは、Hello の代わりに Hiya という Hello, how are you? が省略された挨拶が現地で頻繁に使用されているという、実際に行かないと分からない生きた英語表現を学ぶことができた。加えて、現地に着いたばかりの時は瞬時に自分が言いたいことを英語で伝えることができず、スマートフォンの翻訳機能などでカンニングしてから会話をしていたが、慣れてきたら自分が分かる単語を駆使して会話ができるようになったため、結果として話す際のラグが少なくなったと思う。また、会話をしていてわからない単語や文章があったら、その話が終わらないうちに聞き返すなどして確認したらいいということを学んだ。多くの場合、相手が分かりやすく言い換えて説明してくれるため、新しい語彙や言い回しを自分のものにすることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受けて、様々な国籍の人とのコミュニケーション能力がついたと思う。特に、自身を含む非英語圏の人間が話す英語は訛りが強く、互いに何を言っているかが理解できていないことが多々あった。アジア人同士は比較的コミュニケーションが取りやすかったが、スペイン語圏の人や中東の人の英語は聞き取るのが難しく、何度も聞きなおすことがあった。しかし、写真を見せたりジェスチャーをしたりして理解してもらおうと努力することで、最終的に分かり合えることが多かった。また、日本だと授業中に当てられて間違った回答をしたら恥ずかしいという風潮があるが、現地の授業ではそんな雰囲気は全くなく、気軽に発言できる環境だった。そのため、発言する際に周りの目を気にしたり、確実に正解しなければならないというプレッシャーを過度に感じたりしなくなったと思う。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学で得た積極性は、今後の日本での生活に取り入れていきたいと考える。具体的には、私は今まで授業で分からなかったところは自分で調べたり友達に聞いたりして解決していたが、授業後に先生に質問しに行くなどしたい。また、留学で培った英語力を試すために TOEIC や IELTS を受験したり、大学の英語科目を受講したりするなど継続的に英語学習をしていきたい。加えて、大学にいる留学生の支援などを通して、定期的に英語を使う環境に身を置きたい。そして、日本で困っている留学生や観光客を見かけたら積極的に話しかけて、自分が現地でしてもらったように優しく手助けしてあげたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	K.S	学部・学科	理学部・理学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	英語語学研修		
期 間	2026 年 8 月 4 日～ 2026 年 8 月 28 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

個人の実力別で教科書が配布され、それに沿って授業が行われた。その教科書の各章にはトピックがあり、時間を決めて文法や文章の読み取りなどの問題を演習してから、近くの席のクラスメイトと答えあわせをするという方法が多く用いられた。これにより互いに分からない部分を教え合うことができた。

課題は、教科書に掲載されている文法問題を解き、翌日授業内でその答え合わせをするというものが中心であったが、時には教科書のトピックに沿ったお題の内容のエッセイを書くという課題もあった。それを金曜日に毎週行われるテストの際に細かく添削してもらっていた。これにより自分の英語の表現の癖や、間違いやすい文法を見直すことができ、学習効果が非常に高かったと感じている。

また、スピーキングの練習のために教室にいくつかの質問が書かれた紙が貼られ、その質問を暗記してパートナーに問いかけ、相手が英語で答えるというユニークなワークをやったりもした。さらに授業の冒頭では教師から「昨日は何をした？」という質問が全員に投げかけられるので、それに即興で答えるのも英語を話すいい機会となった。日常の身近な出来事や、放課後・休日にアイルランドの有名な場所へ行ったことへの体験やその感想を話すことで、英語を用いて表現することの楽しさや難しさを実感できた。

授業の終盤では、スマートフォンを活用して英単語の問題に答えるゲームを行い、クラス全体で点数を競い合ったり、二つのグループに分かれて文法のクイズをグループで話し合いながら解いたり、クラス全員で話し合いながらヒントをもとに特定の英単語を当てるゲームをした。デジタルデバイスを用いたアクティビティはゲーム感覚で楽しく、クラスの中が深まるきっかけにもなった。このようにただ講義を聴くだけでなく、受講生が能動的に参加できるように工夫がされていた授業だったので、退屈とを感じることはなかった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

文法面では、一見似ている過去進行形と過去完了進行形の使い分けなど、ニュアンスの厳密な違いを体系的に学ぶことでより自分の伝えたいことを正確に説明する方法が身についた。また、現地アイルランドで使われているアイルランド語の意味や、日常会話でよく使われているスラングなどを学んだこともよい収穫となった。これらは日本の一般的な英語の授業だけではなかなか知ることができないため、現地でのコミュニケーションを豊かにしてくれた。これにより、エッセイを書く際とスピーキングの際にも、文法の問題演習を実践的に活用できるようになった。

さらに、アイルランドの文化や著名人、歴史などをクイズの形式で学ぶ機会も授業内であった。その内容として、国旗に使われている色とその意味や、アイルランド出身の小説家とその作品名、国のシンボルの名称などがあった。単なる言語習得にとどまらず、国の背景への理解がより深まった。授業の中でのゲームのアプリケーションによる学習は、楽しくクラスメイトと競い合いながら、熟語や単語の知識を定着させることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

英語の文法など、日本で英語を勉強するときに細かな違いが分からなかったところを、より踏み込んで学ぶことができたため、どうしてこれほどの用法があるのかという疑問が解決し納得できた。また、英語を話すことについて、私はあまりはっきりと話ができる方ではなく、話そうとしても単語がなかなか思いつかず、話が止まってしまうということもあったのだが「慌てなくていいよ」と教師やクラスメイトが声をかけてくれたので落ち着いて自分の言いたいことを言うことができた。

そしてこのプログラムへの参加こそが自分が初めて海外に行くという経験だったのだが、行きたい方向や教室の場所など自分が分からないことがあったときに、思い切って現地や大学の人に聞いてみた。すると話しかけた人は親切に答えてくれたので、やはり分からないことは素直に聞くことが大切だと感じた。また、「Have a nice day.」と挨拶を交わせたことも自信につながり、それほど身構える必要もなかったと感じた。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

新しいことをするとき、最初は失敗してしまうことが多いと考えられるが、私は特にそれに対して悲観的になりやすい性格である。しかし今回の経験から、悲観的に捉えるのではなく、「自分はいま頑張って挑戦しようとしているのだ」と前向きに受け止めることもできると考えたので、今後何かを新しいことを始める際にはそういった思考を忘れないようにしたい。

また、たとえ英語を流暢に話せなくとも、現地の人々は一生懸命聞き取ろうとしてくれていた。この経験も踏まえて、完璧さを求めるあまり二の足を踏むのではなく、拙くても主体的にコミュニケーションをとる姿勢を大切に学業に励んでいきたい。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	M.M	学部・学科	理学部・理学科
学 年	2 年	派遣国	アイルランド
派遣大学	ダブリンシティユニバーシティ		
コース名	B コース		
期 間	2026 年 8 月 1 日～2026 年 8 月 31 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

留学先の授業では、留学開始の約 4 か月前にプレテストを受験し、その結果をもとにクラス分けが行われた。1 クラスは約 15 人で、文法、語彙、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングをバランスよく学習した。授業はすべて英語で行われ、先生から文法や単語について説明を受けた後、問題を解いたり、ペアやクラス全体で意見を交換したりする形式が多かった。

文法では、動名詞と不定詞の使い分け、冠詞の a・an・the の使い分け、前置詞、受動態、defining relative clauses と non-defining relative clauses、仮定法などについて学んだ。日本で英語を勉強するときとは異なり、文法の説明も英語で行われるため、最初は難しく感じることもあった。しかし、英語を日本語に訳して理解するのではなく、英語を英語のまま理解する機会が多かったことで、個人的には日本で学習していたときよりも内容が頭に入りやすく、実際の英語の使い方を身につけるうえで有意義な授業だと感じた。

また、先生が生徒に積極的に意見を求めるため、質問や発言をしやすい雰囲気があった。自分から発言することで授業にも参加しやすくなり、スピーキングの練習にもつながった。

特に印象に残っているのは「Kahoot!」を利用した早押しクイズである。その日に学習した文法問題だけでなく、洋楽のタイトルなど、さまざまな内容が出題され、楽しみながら英語を学ぶことができた。

毎週金曜日には、リスニング、語彙、文法、リーディングについてのテストが実施された。基本的にはその週に学習した内容が出題されるため、普段の授業をしっかり受けていれば特別なテスト勉強をする必要はないと感じた。課題は毎回ではないものの、教科書やプリントの問題が出され、授業内容を復習する機会となった。授業にはノートと筆記用具があれば十分で、iPad やパソコンなどを使用する機会はほとんどなかった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を通して、英語の文法や語彙に関する知識だけでなく、実際に英語を使ってコミュニケーションをする力の重要性を学んだ。特に、不定詞と動名詞、冠詞、前置詞、受動態、関係詞、仮定法など、日本でこれまで学んできた文法について、単にルールを覚えるのではなく、実際の文章の中でどのように使い分けるのかを考える機会が増えた。

また、授業がすべて英語で行われたことで、英語を日本語に訳してから理解するのではなく、英語を英語のまま理解する力も身についたと感じる。先生の説明を聞いたり、クラスメートの発言を聞いたりする中で、英語を聞き取ってその場で意味を理解することへの抵抗も少なくなった。

さらに、スピーキングやペアワークを通して、自分の考えを英語で伝える経験も得られた。正しい文法だけを意識するのではなく、間違いを恐れずにまず伝えてみるのが大切だと学んだ。一方で、授業で先生の英語を理解できても、ホストファミリーとの日常会話では聞き取れないこともあり、教室で学ぶ英語と実際の会話には違いがあることも実感した。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

留学前は、英語の授業をすべて英語で受けることに対して、授業内容を十分に理解できるのかという不安があった。しかし、実際に授業を受けてみると、自分の英語力に合ったクラスに分けられていたため、授業内容は理解しやすく、先生も分からないことがあれば質問しやすい雰囲気をつくってくれていたため、安心して授業を受けることができた。

一方で、私のクラスは日本人のみで構成されていたため、休み時間などに日本語を話してしまうこともあった。そのため、留学中にできるだけ英語漬けの生活を送りたいのであれば、海外から来た学生に自分から積極的に話しかけたり、「日本語を使わない」と意識したりするなど、自分自身で英語を使う環境をつくる必要だと感じた。

また、ホストファミリーとの会話では、先生よりも話すスピードが速く、アイルランド特有のアクセントもあるため、聞き取ることが難しい場面が多かった。それでも、分からないことを伝えようと丁寧に説明してくれたため、英語が完璧でなくても、まずはコミュニケーションを取ろうとする姿勢が大切だと感じた。アイルランドの人々はフレンドリーで、話しかけてくれることも多かった。そのため、「もっと英語を話すことができれば、現地のひととさらにたくさん話すことができたのに」という悔しさも残り、今まで以上に英語を話せるようになりたいという気持ちが強くなった。

(4) 今後はどう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学を通して、もっと世界中の人とコミュニケーションを取りたいと思うようになった。一方で、英語を思うように話せないことに悔しさも感じた。一か月という短い期間だけでは、英語を十分に話せるようになることは難しいため、日々継続して英語に触れることが重要だと感じた。今後は、留学中に身につけた英語への抵抗感の少なさを維持し、英語を日常的に使う習慣をつくりたい。具体的には、英語のポッドキャストや洋楽を聴いたり、英語の文章を読んだりすることで、日常生活の中で英語に触れる時間を増やしていきたい。また、今回の授業で学んだ文法や語彙を定期的に復習し、大学での専門科目の学習にも生かし

ていきたい。将来的には、言語の壁を越えてさまざまな人とコミュニケーションを取ることを目標に、英語学習を継続していきたい。